

UDCOD

アーバンデザインセンター小田原
令和6年度活動報告書





表紙イラスト

『北条ポケットパークからの小田原駅』

たなかきょおこ

はじめに

アーバンデザインのビジョンづくりを目指して

UDCOD センター長・元東海大学教授
杉本 洋文



UDCOD(アーバンデザインセンター小田原)は、2023年3月に公・民・学協働のまちづくり組織として創設し、まちの魅力をアーバンデザインの視点から見直し将来のあるべき姿を模索する調査・研究活動に取り組んできました。

2025年3月1日にハルネ小田原うめまる広場で開催した2年目の報告会では、加藤憲一小田原市長をはじめ多くの市民に参加いただきアーバンデザインのあり方を議論する機会を得ることができました。

更新時期を迎える小田原

千年都市である小田原は、各時代の宝が重層し新旧の文化が混在しています。さらに、多面性があることも手伝って、まちの全体像が捉えにくくなっています。また、老朽化・空洞化・機能不全等から「暮らし」や「なりわい」に変化が起り、各所でまちの更新計画が立ち上がっています。

これらの個別プロジェクトを単独で進めしまうと、新たなまちの全体像を構築する機会を失ってしまいます。文化と歴史の価値を維持・継承し、風格や誇りを失うことなく個性豊かなまちを創造するために、今、アーバンデザインのビジョンを市民と共につくり上げることが求められています。

取り組みの展望

前述の状況を踏まえ、次のようなアーバンデザイン戦略に挑戦していきたいと考えています。

(1) 小田原らしいアーバンデザインビジョンの構築

小田原らしい新たな都市の姿を実現するために、アーバンデザインの考え方を取り入れ、市民と共有で

きる基本方針をまとめます。

(2) アーバンデザインコミュニティの形成

小田原でのアーバンデザインの活動は初動期であり、まだ認知度が低い状況です。アーバンデザインに関心を持っていただくために、市民や企業の皆さんのファンを増やし、コミュニティの構築に取り組みます。

(3) UDCODの活動拠点の開設

アーバンデザインの活動を日常的に発展させるために、市民と共に課題解決する場として、常設の活動拠点の開設を目指します。

(4) 取り組みの発展と継続

これまで、4つの活動「UD(アーバンデザイン)研究」「都市形成史研究」「エイジフレンドリーシティ研究」「西海子小路周辺地区のまちづくり支援」に取り組んできました。さらなる発展と充実を図るために、今後は具体的な社会実験活動にも挑戦します。

(5) UDCODとエリアマネジメントの融合

2025年度からは、別に市で取り組んでいたエリアマネジメントの活動と融合させ、相互の成果を活かした新たな実践的まちづくりの展開を図ります。

(6) UDCOD賞の創設

表彰制度を創設し、公開選考会を通して市民と共に幅広くアーバンデザインを議論する場を設け、市内のアーバンデザイン活動(施設整備、まちづくり活動・団体等)を発掘して、アーバンデザインの充実と発展を促します。



これまで私たちの活動に対して、多くの皆さんからご協力、ご支援をいただきました。これからもまちの価値と魅力を向上するために、市民の皆さんと一緒にアーバンデザインの取り組みを推進してまいります。

目次

I	令和6年度の活動報告	03
01	UD(アーバンデザイン)研究 小田原駅周辺のアーバンデザインビジョンを描く	04
02	都市形成史研究 昭和の板橋～なりわいと賑わい～	10
03	西海子小路周辺地区のまちづくり支援 西海子の資源を再認識し、新しい使い方を考える	14
04	エイジフレンドリーシティ研究 エイジフレンドリーシティのつくり方	18
II	令和6年度UDCOD活動報告シンポジウム	23
	令和6年度スタッフ	32



I

令和6年度の活動報告

小田原駅周辺のアーバンデザインビジョンを描く

UD(アーバンデザイン)研究

ディレクター：杉本 洋文・作山 康・林 一則

1. アーバンデザインビジョンへの取り組み

小田原駅からお城にかけてのまちなかに、こんな居場所があったらよい、それらが集まり個性豊かな通りや境界が連なるとよい、というのを絵姿にしてみました。公募の市民研究員、学生研究員、行政研究員、まちづくりの専門家が集まったチームで意見を出し合い、アーバンデザインでできること、やってみたいことが見えてきました。

2. アーバンデザインビジョンへの想い

(1) 絵姿で目指す方向を共有したい

令和5年度に検討した都市デザインの方向性を、より具体的にしていく土台として「こんな場所」に「こんな活動」という情景を、絵姿として共有してみるべきだと考えました。

(2) 再開発などの動きを受けての、まちなみのあり方を探りたい

小田原のまちなかは更新時期を迎えた地区も多く、再開発の検討が進む通りや街区もあります。そうした個別の動きに対して、通りや境界としてのつながりを働きかけていく期待を表現したいと考えました。

(3) そこここで芽吹きつつある取り組みを踏まえて励みたい

将来の姿を語る上で、必ずしも広くは知られていない、これまでの市街地整備の取り組みを確認し、また近年、民間主体で芽吹きつつある、まちを担う活動やリノベーションの動きにも注目すべきだと考えました。



そして、おおよそ 20 年後に向けて実現したい情景の集まりとして、スケッチを描いてみました。ひとまずは、今までの行政計画の枠組みにはとらわれずに未来に向けた物語として描くことにし、まちを想う人々の議論に供するものとししました。

3. 未来に向けた物語としてのスケッチ

小田原のまちなかは、個性を伸ばしていけそうな多彩な通りや境界が連なることが魅力だということが見えてきました。スケッチを通してそれらを巡り歩いてみましょう。

まちなか居住が増えてきたので、徒歩や自転車で日常的に使う暮らしの場としても魅力的な境界が求められるという視点で検討を進めました。



イラスト：福田 桃寧

検討箇所

- ① まちの顔になる交差点のにぎわい広場
- ② 再開発などの動きがある駅周辺街区
- ③ お城につづくそぞろ歩きの道
- ④ まちに活動が見える交流のお堀端
- ⑤ まちなか住まいと安心できる公園のような道
- ⑥ 城下町をめぐる緑の輪を育てる表通り
- ⑦ 小さなまとまりでもてなす小まちなみ
- ⑧ 路地や小路を活かす街区の裏表の使いこなし
- ⑨ まちの文化的ストックを活かし「生活街」に再生
- ⑩ まちビジネスやまち活動呼び込む界限
- 小田原トランジットモールとパークアンドライド

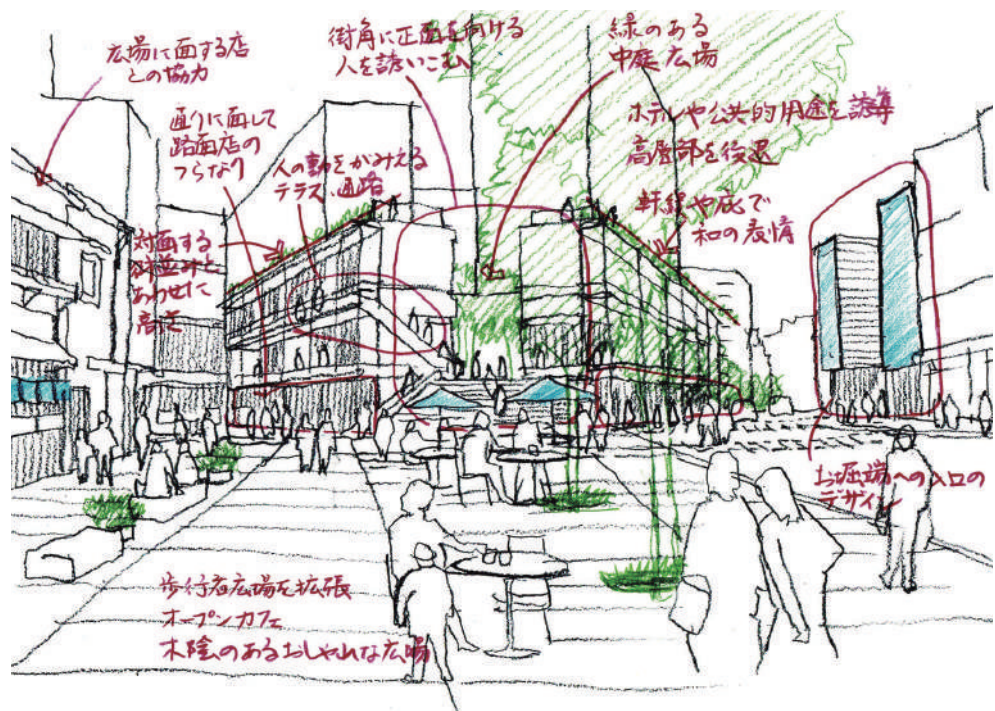


(1) スケッチとストーリー

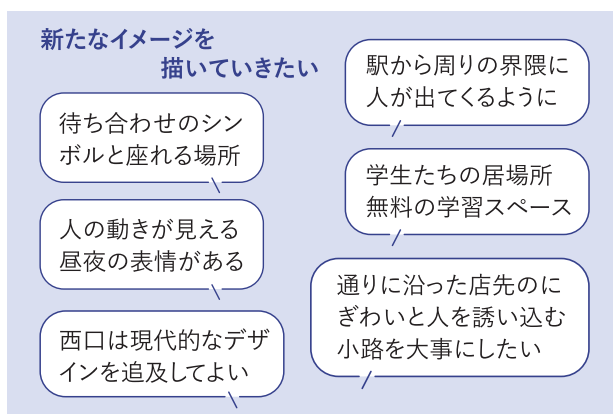
① まちの顔になる交差点のにぎわい広場

小田原駅の正面に見える特徴的な三角広場は、まちなかの顔になった。オープンカフェや木陰の広場の先には、立体的な広場の周りにホテルなどを複合した開発が続いている。低層部には通りや広場に向けた店が連なり、人の動きが見える階段やデッキが楽しい。

錦通りやお堀端通りに歩を進めよう。



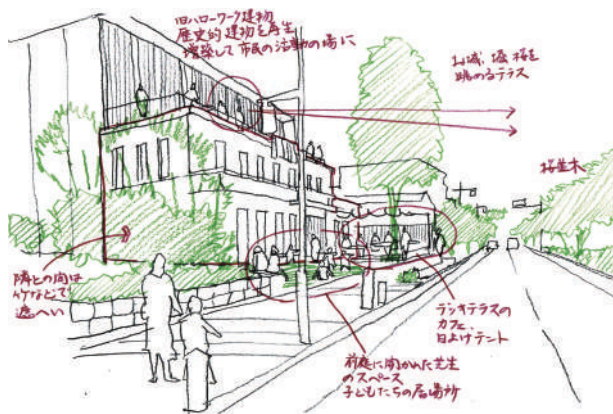
② 再開発などの動きがある駅周辺街区



小田原駅と周りのまちが自然につながるように。東口ではおいしいもの横丁を引き継いだヒューマンスケールの界限が人々を惹きつける。西口は高校生など若者の居場所もできて人気がある。

※具体のまちなみへの展開イメージは、再開発に向けての方向性を見定めた上で今後検討していきたい。

④ まちに活動が見える交流のお堀端

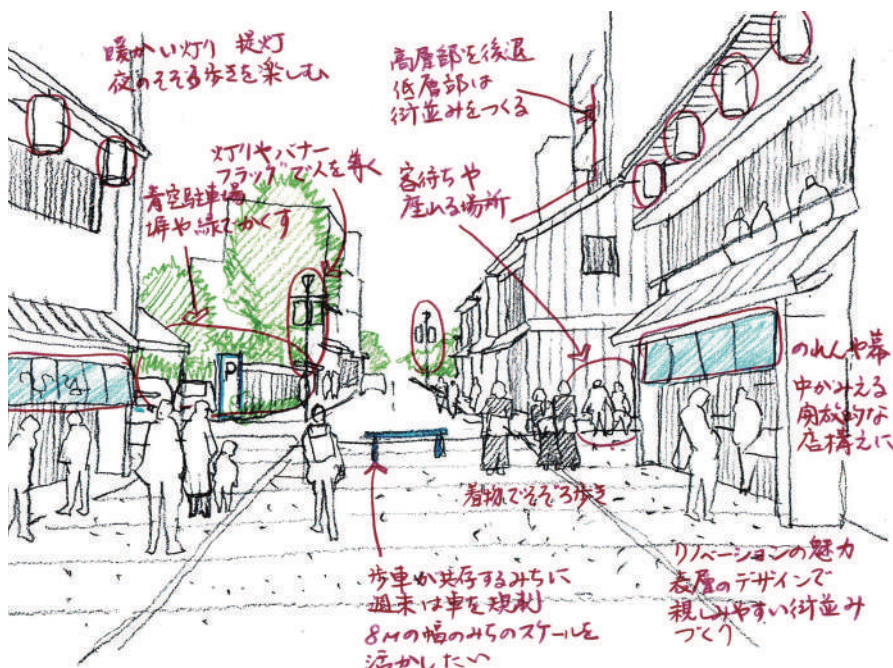


旧ハローワークの建物は、まちに関わる情報と交流の拠点に再生した。アーバンデザインや市民活動の支援拠点、高校生が進めるまち活動の事務局にもなり、会議や展示が盛んに行われ人々が集う。お堀に臨むテラスや子どもの居場所もあり、観光客も立ち寄る。

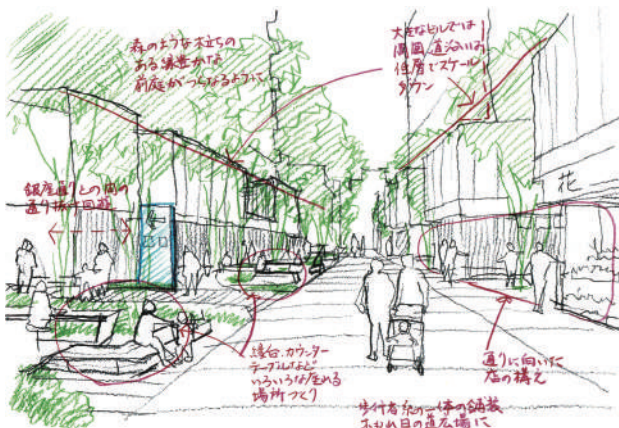
③ お城につづくそぞろ歩きの道

お堀端通りは、観光客にも地元の人にも愛される個性的な専門店が並ぶ。

週末は車を制限して、ゆっくりとまち歩きや食べ歩きができる。暖簾や幕や暖かみのある灯りには、歴史やもてなしの心を感じる。店先のベンチに集う人、和服で歩く人、朝のジョギング、三の丸ホールの催し後の夜のそぞろ歩きと楽しみ方は多彩だ。

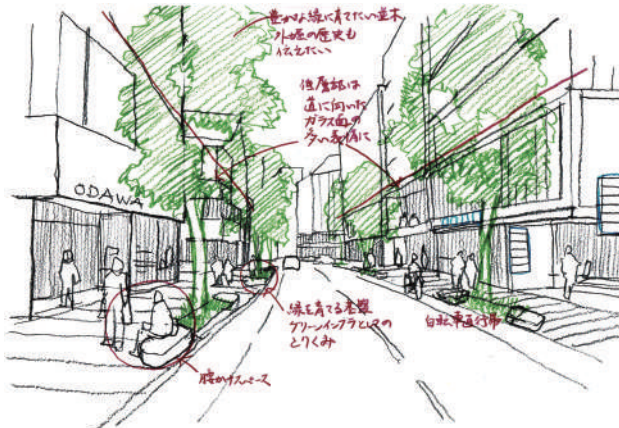


⑤ まちなか住まいと安心できる公園のような道



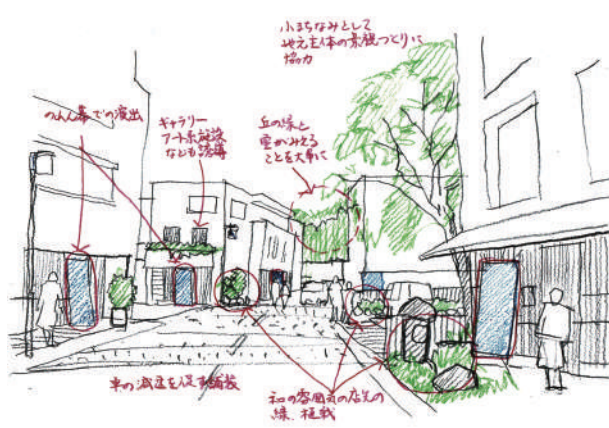
ダイヤ街は、新たな開発の足元に緑が多く植えられ、公園的な道広場になった。森のような緑陰の下で、ベビーバギーの子育て世代が集い、一方でビジネスパーソンがランチするなど、さまざまな人が思い思いに過ごせる目届きの良い安心できる場所だ。

⑥ 城下町をめぐる緑の輪を育てる表通り



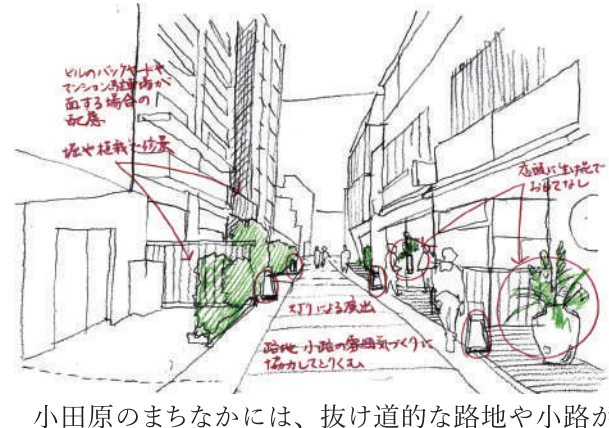
道幅がある表通りには、豊かな緑が連なっている。のびのびとした緑陰は美しく、ビルの2階3階からも自然を楽しめ、まちの魅力になった。まちなかに少ないと言われていた緑を増やす取り組みは、かつての城下町の土塁や堀と重ね、つなぐように進めている。

⑦ 小さなまとまりでもてなす小まちなみ



しろやま商店街では、小さいながら小粋なまちなみづくりが進んだ。山手の住宅地、文教地区を背景にして、落ち着いた雰囲気の花と緑のあるおしゃれなレストランなどが連なり、店が協力して通りのブランディングに取り組んでいる。

⑧ 路地や小路を活かす街区の裏表の使いこなし

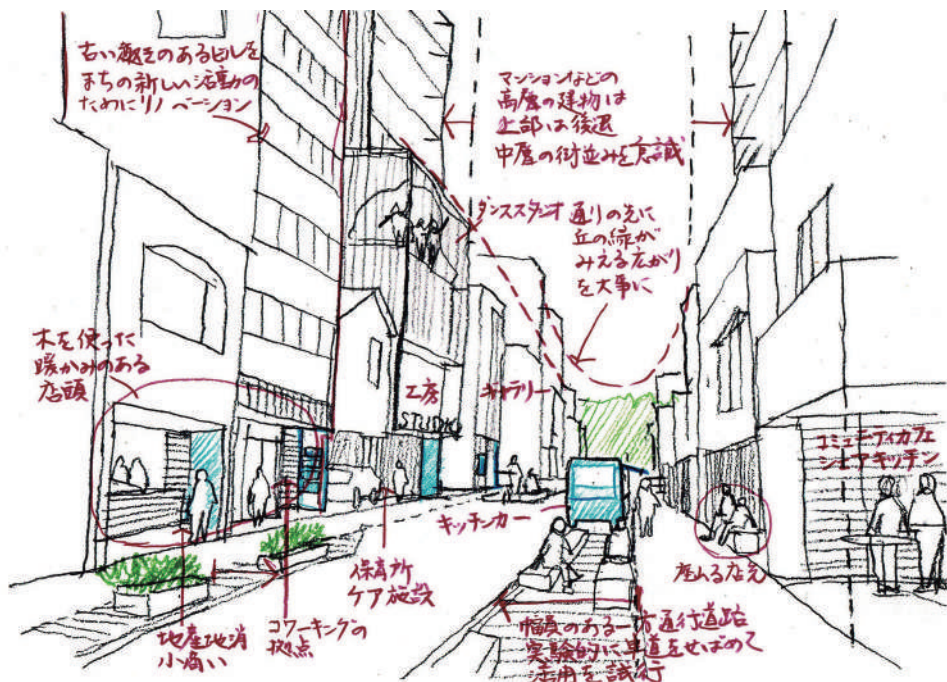


小田原のまちなかには、抜け道的な路地や小路がいくつもあることも特徴だ。親しみやすい飲食店も多く、通りで協力し店先に生花や行灯を飾るなどして雰囲気演出している。表通りに向けたビルや共同住宅では、路地側が駐車場や裏口で殺風景にならないよう配慮する工夫もしている。

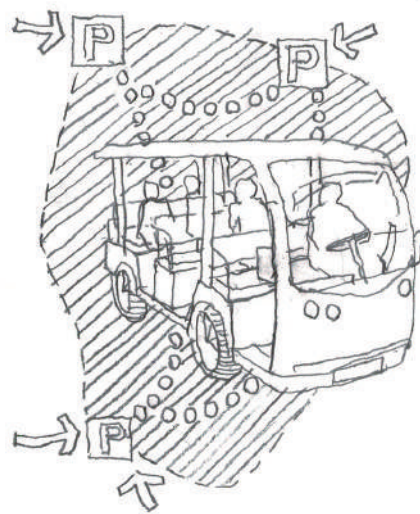
⑨ まちの文化的ストックを 活かし「生活街」に再生

銀座通りでは、若い人々を中心としたリノベーションによるこだわりの店や仕事場が増えた。高齢者や福祉の活動拠点、元からの画廊や工房などとも一体となり、新たな生活文化街となった。

一方通行の余裕ある通りを使い、路上の商いや休憩の場づくりも試行している。新たな共同住宅も1階は通りに開き、まちなみと協調して空と山並みへの見通しを確保している。



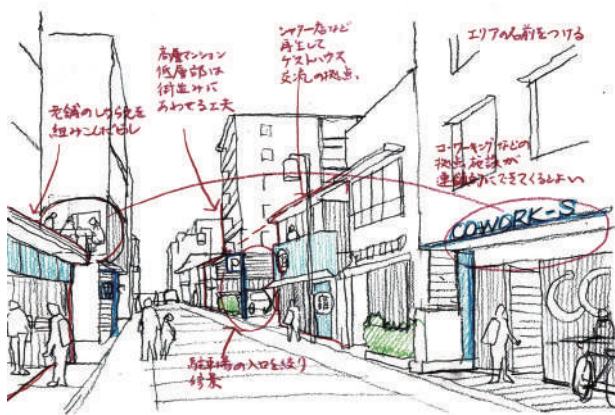
● 小田原トランジットモールとパークアンドライド



車より歩行者を優先したトランジットモール型のまちづくりを目指している。車で来街者はまちの外周に駐車し、そこからかっこいい、また楽しい乗り物に乗り換えることがおしゃれなスタイルとなる。自動車メーカーと協力して運営している。

青空駐車場などの点在していた低利用の土地と入れ換えたりして集約することで、計画的な駐車場の誘導を進めてきた。

⑩ まちビジネスやまち活動呼び込む界限



うらちよう商店街周辺では、若い店主たちが協力して新たな界限づくりの動きが進む。飲食店などと業務施設やゲストハウスが混じって、外からの人も受け入れるまちになった。

都市サービスとインキュベーション・起業の場として行き交う人が増えた。新たな共同住宅にもまちに向けた活動がのぞく。

4. まちの価値を高めるアーバンデザインに向けて

スタディ(検討)から浮かび上がってきた大事にしていきたいことをまとめました。

(1) 居場所

- 多彩な界隈がコンパクトに詰まったまちなかを活かそう
- お気に入りの立ち寄る場所やたたずむ場所をあちこちに増やそう
- 学生たち、若者たちがいつでも使える場所をつくって
いこう
- 小田原城や三の丸ホールの周りは夜景も楽しめる場所を生み出そう

(2) 物語性

- 通りの先に空と山並みが見え、城が垣間見える眺めを守ろう

- 歴史が普段着として感じられるまちかどを増やそう
- まちかどの近現代の資産や営みにも目を向けて活かそう
- 城下町の組み立てを受け継ぐ緑と水辺の輪を大切にしよう

(3) 通りに向いた活動

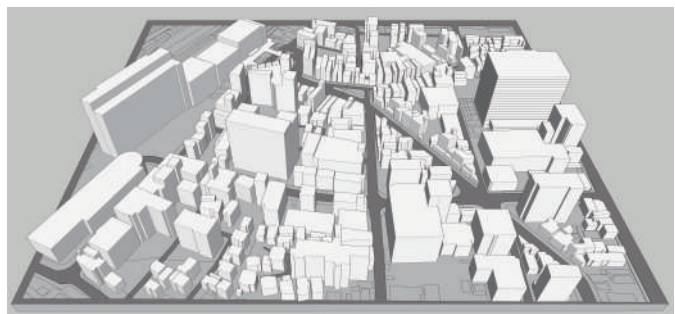
- 小さなまちなみや小路で、店先軒先のもてなしに取り組もう
- 足元の活動やにぎわいが通りから見える「まち建築」づくりを進めよう
- 子どもたちにも安心な、目が行き届く広場に使いこなそう
- まち商いやまちビジネスのチャレンジを受け入れて、応援していこう

検討経過

- 2024.08.13 模型と地図を囲みまちを知る
- 2024.09.10 取り上げたい場所を選び検討
- 2024.10.08 スケッチによるイメージづくり (1)
- 2024.11.12 スケッチによるイメージづくり (2)
- 2024.12.03 まちづくりで大事にしたいことを整理
- 2025.01.21 スケッチに盛り込むことを確認
- 2025.02.04 取りまとめの方向
- 2025.03.27 今後の取り組みに向けて

研究会メンバー

市民研究員 五十嵐 敦子、中津川 毬江
 学生研究員 梶村 駿介、福田 桃寧
 行政研究員 吉澤 元克、細谷 夢津美
 まちづくり専門家 杉本 洋文、作山 康、林 一則
 (事務局員 渡邊 佳織)



小田原駅周辺の3Dモデル 作図：梶村 駿介

昭和の板橋～なりわいと賑わい～

都市形成史研究

ディレクター：稲益 祐太

1. 活動のあらまし

都市形成史研究グループは、今年度（2024 年度）より東海大学建築都市学部准教授の稲益祐太がディレクターを務めることになった。まず、2024 年 7 月 12 日におだわらいノベーションラボにて、稲益が「都市史研究について」と題して、これまでに取り組んできた都市史研究の視点と方法について報告を行った。その後、杉本センター長、昨年度の研究を牽引していた「NPO 法人 小田原まちづくり応援団」の福田氏と池田氏、UDCOD 事務局を交えて、研究テーマや方法について議論した。

研究活動に先立ち 8 月 3 日に、活動対象地を選定するため、東海大学有志学生数名を加えて板橋地区、小田原漁港、西海子小路周辺、かまぼこ通り、銀座通りを巡り、主要な施設等を見学した。その後、おだわらい市民交流センター UMECO で意見交換を行い、板橋地区について研究を進めていくことを決定した。

板橋地区は、旧東海道沿いの街道町であるとともに、小田原城下に給水していた小田原用水（早川上水）の取水口があり、小田原の都市形成において重要な役割を果たしていることから、10 月 13 日に「小田原早川上水をつなぐ会」の協力のもと、取水口から用水を辿る実地調査を行った。

2024 年度の主な取り組み

- 2024.07.12 キックオフミーディング
- 2024.08.03 対象地選定のためのまち歩き
- 2024.10.13 「小田原早川上水をつなぐ会」との実地調査
- 2024.01.23 「板橋地蔵尊大祭」実地調査

その後は、主に小田原市立中央図書館の「地域資料コーナー」で資料収集を行い、板橋地区の近代以降の変容についての分析を行っていった。

また、2025 年 1 月 23 日には板橋地蔵尊大祭に参加し、東海道の歴史と街道町としてのにぎわいについての情報を得ることができた。

これら今年度の研究成果は、3 月 1 日に開催された「令和 6 年度 UDCOD 活動報告シンポジウム」において報告した。

2. 近代の小田原用水

小田原用水は、北条氏が引いた日本最古の上水道と言われており、早川を水源としていることから「早川上水」とも呼ばれている。板橋に取水口があり、そこから板橋地区内を流れて城下に達し、家々を潤していた。現在はほぼ暗渠あんきょとなっているが、今でも水は流れ続けており、小田原城の堀に注いでいる。小田原市では、近代的な水道施設が完成したのは昭和 11 年（1936 年）であり、それ以前は生活用水として利用されていた。

板橋地区では、取水口から板橋見附交差点付近までを流れ、旧内野醤油店の北側を流れる水路を見ることができる。流路についてはさまざまな意見があり、史料的な裏付けが明確に示された図は、管見の限り見出すことができない。『小田原市歴史的風致維持向上計画（第2期）』では、開渠かいきょと暗渠を区別した「小田原用水位置図」^{※1}が掲載されているが、どの時期の流路を示しているのかは明確には記されていない。

そこで、流路を明らかにするために、旧土地台帳付属図面（以下「旧公図」という。）を収集した。旧公図には「大正十二年九月震災ノ為メ焼失ニ付階調

ス」と記載されていることから、大正末期以降の状況が記されているものと推察される。六葉にわたる板橋地区の旧公図のなかには、水路が青色で描かれており、そこには「巾六尺」などの水路幅に関する記載も読み取ることができる。その流路を現在の地図上に転写したものが下の図1である。

まず目を引くのが、旧東海道を流れる水路の存在である。水路幅の記載はないが、他の水路よりも細く描かれている。そして、旧東海道の両側に流れており、直交する道との交差点には橋が架かっているのが見て取れる。また、現コーナンビーバートザン小田原店の周囲では、従来考えられていた水路よりも多い流路が存在していたことが明らかになった。

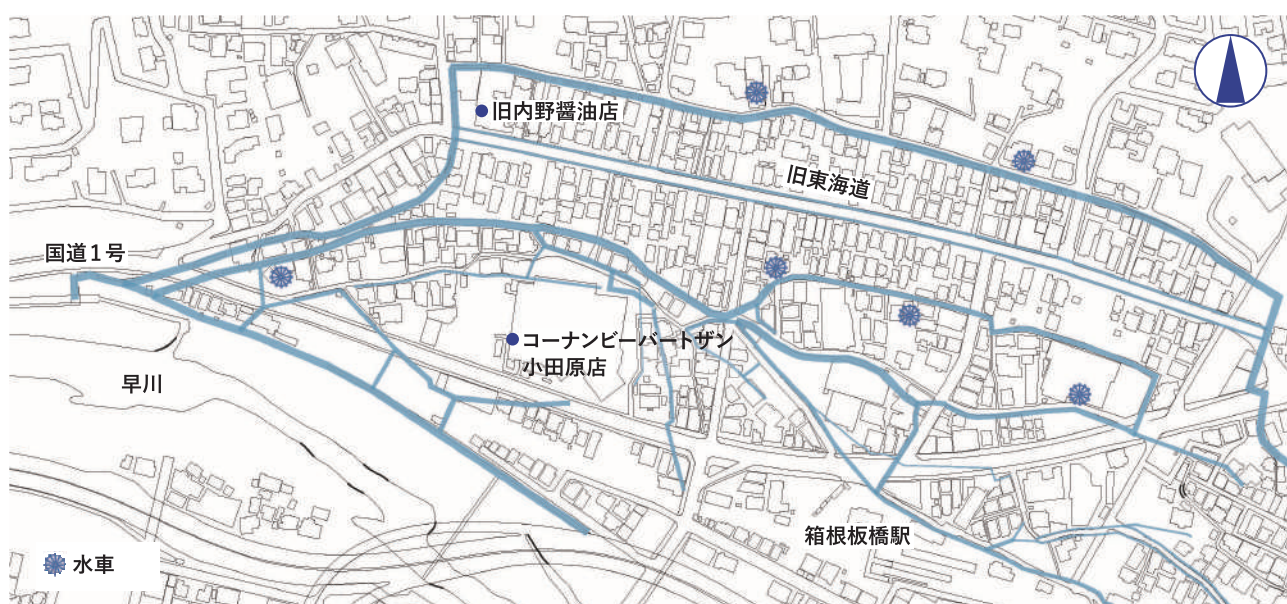
さらに、明治期の「旧版地形図」を見ると、水車の記号が記載されている。実際、『神奈川縣皇國地誌残稿（下巻）』（明治18年・1885年）によると、板橋には「水車搗米商^{つきごめ}」が28戸あったことが記されており、小田原用水（早川上水）は上水だけではな

く、水車利用もなされていたことがわかる。しかし、水車があったと言われている旧内野醤油店の用水路沿いには水車の記号は記載されておらず、「旧版地形図」は中縮尺の地図であるため、位置や数が正確に示されているとはいえないであろう。水車の位置や利用目的については、今後の課題としたい。

3. 板橋のなりわい

板橋は北条氏支配期から職人が暮らしていた。北条氏の石切棟梁であった石屋善左衛門はのちに江戸城の修築や御台場の構築などにも携わった人物であり、その子孫は現在でも「(株)青木石濱^{こうや}」として石材業を営んでいる。伊豆相模の紺屋棟梁であった津田藤兵衛は、北条氏から職頭に任ぜられて染物職人^{あいがめやく}から藍瓶役^{※2}を徴収する権利を保証されており、津田家は江戸時代にも引き続き染物業を営んでいた。この他にも、さまざまな職人が暮らしていたようである。

明治期にも板橋には職人が多く居住していた。『神



(図1) 小田原用水と水車の位置の復元図

奈川縣皇國地誌殘稿（下卷）』によると、茅屋葺4人、大工3人、木挽^{こびき}3人、板屋根職1人などの建築関係者をはじめ、塗師5人、鍛冶3人、理髪1人の職人たちがいた。製造業としては、清酒醸造、醤油製造、水油製造が1軒ずつ記載されている。また、水車搗^{つき}米商28軒、穀物商5軒、飲食店2軒のほか、漆器商、酒類小売商、質屋商、理髪床が1軒ずつあり、商業の集積も見られた。さらに、荷車挽15人、人力車夫11人、駕籠^{かご}かき6人がおり、街道町らしい職業といえるだろう。

大正期については、大正5年の『郡勢要覧』によると、板橋のほかに風祭、入生田、水之尾を含む大窪村の産業別生産額の割合が、農産業17.0%、畜禽産業0.1%に対して、工産業が82.9%を占めており、家内工業的な製造業、特に木工芸品関連の産業が主であったことがわかる^{※3}。

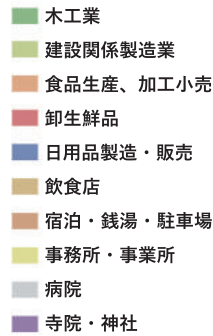
4. 昭和の板橋

昭和期初期も変わらず『大窪村勢要覧』（昭和11年・1936年）によると、指物や挽物、曲物などの木製品の生産額は156,455円と最も多く、漆器の生産額は102,310円で、職人の数も154人と68人を数えるほどで、木工業職人のまちであったことがわかる。染物も4軒あり、生産額は13,725円であった。醸造業は明治期から続く清酒製造と醤油製造がそれぞれ1軒ずつあり、合計38,950円を売り上げていた。一方、農業全体では70,297円を売り上げており、なかでもみかんが29,780円で最も多く、次いで米が27,693円、その他に大麦・小麦、大豆などを栽培していた。

戦後になると、伝統木工芸品の製造量は少しずつ減少し、代わりにその技術を活かした製品として厨房

用品が製造されるようになった。なかでも「サラダボール」は小田原の新たな特産品となった。その中心的企业が板橋の日下部産業であった。日下部産業は、昭和27年（1952年）に築地の全国物産館で開催された「サラダボール見本市」に出品し、1位の中小企業庁長官賞を受賞したほどであった^{※4}。そもそも、外国人が使用している金属製のサラダボールを見て、衛生面から木製を考案し、昭和23年（1948年）にはアメリカの見本市に送ったのが始まりである。それが好評を博して注文が殺到、輸出を開始した。はじめは2、3軒だった同業者も、昭和29年（1954年）には140軒ほどに急増し「輸出クラブ」を結成して業界の発展に貢献したという^{※5}。昭和32年には全国での生産高の70%が小田原市内の工場によるものであり^{※6}、アメリカ市場への輸出が主な販路であった。材料である原木は主にミズメザクラが選ばれ、樹齢120年以上のものが必要であったが、県内では入手が困難なため、主に静岡、埼玉、山梨、群馬、栃木などの関東近郊、さらに長野、名古屋、福島、青森、高知などからも仕入れており、約9割は県外からのものであった^{※7}。このように、戦後になっても製造業は盛んであり、職人の町としてなりわいが継承されていた。

昭和中期から後期にかけて、板橋のなりわいについてさらに詳細な分析を行うため、「ゼンリン住宅地図」と「商工名鑑」を照合し、業種ごとの変化を追った（図2）。1950年代後半は箱根物産関連の木工業者が70軒以上を数え、一大産業であったことがわかる。しかし、1960年代前半になると、その数は40軒ほどに減っていった。1970年代前半には食料品販売店が増え、国道1号沿いには日用品や飲食店が並ぶようになった。また、複数の事業所が入居するビルが



建つようになった。1980年代前半には食料品や日用品の商店の割合が高く、さらに商工名鑑に掲載された事業者数がピークに達し、板橋のにぎわいも増していった時期だと思われる。しかし、1990年代前半になると事業者数は減少していき、木工業などの製造業だけでなく商店もなくなり、板橋の住宅地化が進んでいった。

5. おわりに

板橋は近代になってからも製造業をなりわいとする住民が多く、昭和中期までは職人文化を感じるまちであった。しかし、時代の変化とともに、生鮮品や生活用品を販売する店舗が増えていき、2000年代以降は事業所や集合住宅、駐車場などに変わる例が見られるようになった。それにより、敷地内に製造所を構えていたり、住宅の一部を店舗や作業空間としたりする住宅が建ち並んでいた板橋のかつての姿は消えつつある。

しかし近年、旧小田原市役所大窪支所（旧大窪村役場）や旧下田豆腐店、元製麺工場などの歴史的な建物を改修して工房や販売所に転用したり、近代の洋風住宅を喫茶店に転用したりして、板橋に再び「なりわい」によるにぎわいが甦りつつある。これからのまちづくりを考えていくうえで、これらの板橋の個性を活かしていきながら、よいまちにしていけることが求められるだろう。

※1. 小田原市『小田原市歴史的風致維持向上計画（第2期）』令和3年3月

※2. 江戸時代、紺屋に課された雑税。藍瓶の個数に応じて課された

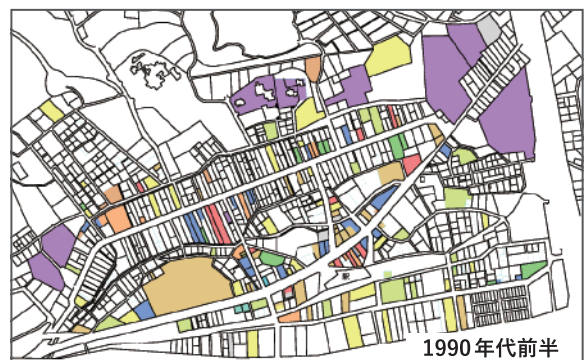
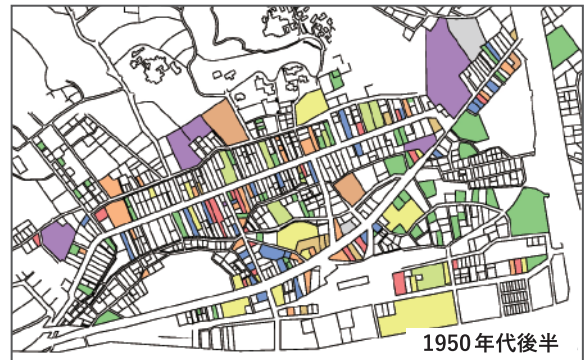
※3. 内田哲夫・岩崎宗純『小田原地方商工業史』夢工房、1989年

※4. 神奈川県『箱根物産々地診断診断書』昭和32年

※5. 小田原新聞社編『小田原地方誌 昭和二十九年度版』昭和29年

※6. 2位は会津若松市、3位は静岡市であった（神奈川県、前掲書、昭和32年）

※7. 神奈川県、前掲書、昭和32年



（図2）板橋の商工業分布図

西海子の資源を再認識し、新しい使い方を考える

西海子小路周辺地区のまちづくり支援

ディレクター：野口 直人

1. まちの課題

西海子^{さいかい}小路周辺地区は、歴史的価値の高い別邸や美しい桜並木が保持されている閑静な住宅街である。しかし近年では、大きな敷地の分筆による情景の変化や交通量の増加による安全性低下、桜の老齢化による景観維持などの問題が顕在化している。さらに住民の高齢化によるコミュニティの維持や共有すべき歴史的アイデンティティの継承、地元への愛着の希薄化などが、まちの課題として挙げられている。

2. まちの資源を再認識する

まちの課題に対して、内在するまちの魅力や個性を活用することが、問題に対する免疫の強化とまちの持続性につながると考える。2023年度に引き続き西海子の資源を再認識するため、客観的な評価の有無や物事の大小にかかわらず、外部からの視点や見立て、何気ない出来事や習慣への眼差し、子どもの視点など、さまざまな切り口から現地調査やインタビュー、イベント企画などを実施した。

2024年度の主な取り組み

- 2024.05.03~05 松原神社・居神社例大祭参加
- 2024.06.03 花園幼稚園へのインタビュー
- 2024.08.24 イベント企画「西海子探検隊」
- 2024.10.13 「小田原早川上水をつなぐ会」とのまち歩き
- 2024.11.12 小田原市文化政策課・図書館へのインタビュー
- 2024.12.07 移住者へのインタビュー
- 2025.01.12 第32区餅つき・どんど焼き参加
- 2025.03.15 展示企画「西海子の帰路展」
- 2025.03 冊子『西海子の帰路ver.2』発行

※キャプション中「冊子」は『西海子の帰路ver.2』



(fig.01) 西海子のハレ_冊子 p.03-04



(fig.02) 祭りで見えるまちの使い方 ほか_冊子 p.07-08



(fig.03) 多様化する公民館 ほか_冊子 p.09-10



(fig.04) つどいば大蓮寺 ほか_冊子 p.11-12

2024 年度は、西海子小路周辺地区における非日常的な要素である「ハレの日」(fig.01)、日常である「ケの日」(fig.05) に大別して、まちの資源を拾い上げてきた。「ハレの日」において日常とは違った様相や使い方「ケの日」において見過ごされがちな小さな出来事などを並列し、魅力を再認識することで、今まで気付かなかった物事の関係性や共通要素、違った見立てや活用方法などを見出ししていく。

(1) 西海子のハレ

城下町であり数多くの寺社を抱える小田原は、お祭りやイベントなどがとても多いまちである。例大祭はまちの様相を一変させ、日常では何でもない場所に意味を付加させる。紙垂が巡らされた細い路地を神輿が通り、まちに点在する小さな余白（駐車場やまちかど）を簡易な御旅所として見立て利用している（fig.02）。公民館や旧保健福祉事務所跡地において、酒宴の直会が行われたり祭典事務所が設けられるなど多様な使われ方がされている（fig.03）。

そのほかにも納涼祭や餅つきなど自治会・子ども会行事の小さなハレの日においては、大蓮寺境内が地域住民でにぎわい、活動の拠点となるなど（fig.04）、まちの違った側面と空間の使い方が見えてくる。

(2) 西海子のケ

お屋敷の町割を継承する別邸や小田原用水（早川上水）など、西海子には日常に潜む特異な環境がある。そういった環境下での日々の行為や習慣、認識など、見過ごされがちな小さな事象に焦点を当てる。

例えば、現在は使われずに遺構として残る小田原用水（早川上水）だが、法面の石垣がこの地の生態を映し出していたり、住居が庭の一部として活用している事例があるなど、西海子のアイコンとしての役割



(fig.05) 西海子のケ_冊子 p.13-14



(fig.06) 遺構を愛でる暮らし ほか_冊子 p.17-18



(fig.07) まちで育てる花園幼稚園 ほか_冊子 p.21-22



(fig.08) 西海子探検隊 ほか_冊子 p.25-26

を担っている (fig.06)。花園幼稚園の園児たちは、日々のお散歩で小田原文学館の庭や御幸の浜に繰り出すなど、日頃からまちに親しむ生活を送る (fig.07)。

そこで、子どもたちのまちに対する認識を調査するため「西海子探検隊」を企画し、まちに落ちている石ころや葉っぱ、木の実などを自由に探してもらい、移動経路や行動範囲などを記録した (fig.08)。大人が把握していない抜け道や場所への認識の強さと、西海子における舗装されていない剥き出しの地面の多彩さが浮かび上がった。

3. まちの新しい使い方を考える

再認識した、西海子の魅力的な資源の関係性や共通要素を抽出し「地域・空間デザインのための指標」、想定される効果を挙げる。

(1) 通り抜けられるまち (fig.10)

小田原文学館に代表されるような敷地内を通り抜けることができる場所を増やすことで、寄り道を誘い、まちを味わう歩き方を誘発する。魅力的な敷地が隣接する場所では、領域をまたいだ活動を生み出す。さらに、寄り道で歴史的資源に気軽に触れたり、敷地への多方向からのアクセスが可能になると多様な暮らしが交錯する場所となる。

(2) 二つの顔を持つ場 (fig.11)

大蓮寺境内や小田原文学館、旧保健福祉事務所跡地のように、敷地や施設が一つの機能に縛られることなく別の顔を持たせることで、内での活動が可視化され場の敷居を低くする。柔軟に場の性質を切り替えることで、多彩で小さなハレを生み出すとともに、移住者や来訪者が気軽に地域活動に参加する隙をつくり出す。



(fig.09) まちの新しい使い方を考える_冊子 p.29-30



(fig.10) 通り抜けられるまち_冊子 p.31-32



(fig.11) 二つの顔を持つ場_冊子 p.33-34



(fig.12) 環境と共生する空間_冊子 p.35-36

(3) 環境と共生する空間 (fig.12)

小田原用水（早川上水）や石垣などの歴史的遺構や、剥き出しの地面に代表される自然環境と共生する空間をつくる。単なる保存のためではなく新たな活用法や価値を付与することで、地域特有の環境に対する愛着や子どもたちの想像力を育む。

4. 地域住民への共有

調査提示した資源及びデザイン指標を地域住民と共有するため、冊子『西海子の帰路 ver.2』を作成し配布している (fig.13)。

また、2025 年 3 月 15 日に旧松本剛吉別邸と旧保健福祉事務所跡地にて「西海子の帰路展」を開催し (fig.14,15)、冊子の内容とともに地域模型と西海子探検隊で子どもたちが作成した模型、大学院生による 2 つの提案事例 (fig.16) (2024 年度修士設計：「西海子の共生帯」津村翔、「揺れ動く西海子」庭山隼輔)、住民の活動や日常をまとめた動画を展示した。展示そのものが、旧松本剛吉別邸と旧保健福祉事務所跡地の新しい使い方の一つの事例となった。

5. 次年度の展望

提示したデザイン指標を基にしたまちでの空間実装を目標とし、地域で活動する各団体と共同でのイベントを企画するなど活用法を模索する。



(fig.13) 西海子の帰路展 地域模型展示と配布冊子



(fig.14) 西海子の帰路展 庭園での展示



(fig.15) 西海子の帰路展 主屋での展示



(fig.16) 西海子の帰路展 茶室(雨香亭)での修士設計2点の展示

エイジフレンドリーシティのつくり方

エイジフレンドリーシティ研究

ディレクター：後藤 純

1. はじめに

エイジフレンドリーシティ（Age Friendly City、以下「AFC」という。）は、世界保健機関（WHO）が提唱する、高齢者が安心して暮らし続けられる都市のあり方を示す国際的な取り組みです。WHO は、22 か国 33 都市を対象とした調査を基に、8 つの領域・84 項目のチェックリストを策定しました（図1）。これに基づき、各都市・地域が自らのまちを診断し、改善に向けた行動計画を策定することが推奨されています。2024 年 11 月時点では、世界 53 か国・1606 の都市・コミュニティがこのネットワークに参加しています。しかし、どのようなまちをつくれば良いのか。具体的なビジョンは出されていません。世界で最も高齢化している日本が、ビジョンを創り出していく必要があるのです。

AFC を一言でいえば、人生 100 年時代、自分の人生を自分らしく（一人暮らしでも、要介護状態でも）楽しく暮らし切れるまちです。AFC は、地域包括ケアシステムと地域コミュニティ（の再生）、そして両者をつなぐ都市デザインの 3 本柱が素材となります。そして



（図1）エイジフレンドリーシティの8領域

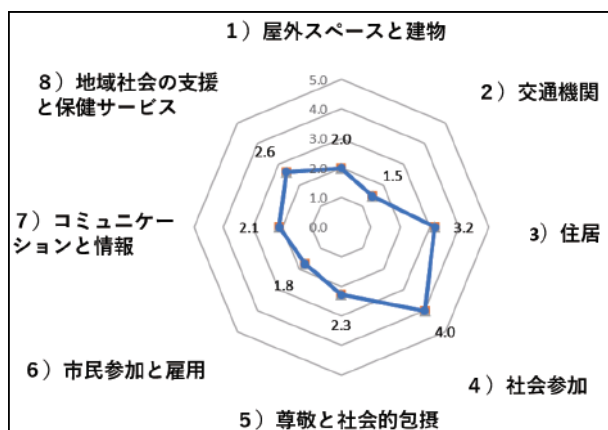
「どんなまちをつくれば、安心して楽しく暮らし切れるか」に正解はありませんので、最も重要なことは、住民自身が問いを立て、対話し、試行錯誤しながら共に描いていくことです。

2. 豊川地区でのモデル事業

このような関心から、AFCの社会実装を見据え、豊川地区をモデルとして、地域包括ケアとコミュニティデザインの統合に向けた実験的な取り組みを推進しました。

2022年度に、豊川地区において、AFCを考える住民ワークショップを開催しました。また東海大学大学院の演習において、豊川地区の課題分析をしています（図2）。両者の分析は一致しています。

豊川地区は、自然環境と自動車の交通アクセスの良さを活かした宅地開発が進み、子育て世代など若い世代の流入が顕著になっています。しかし一方で、かつての田畑は少しずつ縮小し、ロードサイドショップや戸建住宅の開発が進んでいます。かつての地域資源や風景が失われる懸念もあり、今後、まちの荒廃や地域の空洞化が懸念されています。また、駅まで徒歩で行くには遠く、車依存型の生活構造です。高齢化が進行する中で、



（図2）豊川地区のAFC8領域の評価



(図3) シニアライフプランセミナー



(図4) 市職員向けの研修会

車を手放した途端に通院・買い物といった日常生活上の移動が困難になることが想定されます。交通インフラの再検討や生活圏の再構築も求められています。

地域コミュニティの点では、長年住み続けてきた高齢者と新たに転入してきた若年世代との間に、価値観や生活リズムの違いによる分断が発生しそうです。世代間のギャップを放置すれば、孤立や摩擦の温床ともなりかねませんが、逆にコミュニティのつながりを意識的に育てることができれば、高齢者にとっての生活の質を高め、若い世代にとっても持続可能な暮らしの基盤となる可能性を秘めています。

さらに、地域の高齢化率は今後も上昇が見込まれ、独居や老老世帯が増加することに伴って、要介護認定率も高くなる傾向にあります。制度的な支援だけでは支えきれない生活課題が顕在化する中で、住民同士のゆるやかな見守りや、外出・交流を促すまちの仕掛けが必要とされています。

AFC を構築するにあたり重要なことは、このように住民から見た課題と専門家から見た課題を整理して、取り組むべき論点を絞り込んでいくことです。病気と違って、明確な課題の基準はありません。ある人から見れば課題でも、地域の個性と捉えて活かしていくこともできるからです。この課題分析をたたき台として、

豊川地区の皆さんと議論し、次の3点について取り組むことにしました。

- ① 地域に新たに流入したリタイア層や子育て世代といった新しい・若い世帯のニーズを的確に捉え、彼らが地域活動に主体的に関わるきっかけを設けることです。これは、単なる参加にとどまらず、地域の将来を担うリーダーシップの確立を視野に入れた仕掛けづくりにつなげるためです。
- ② 高齢者や子育て世帯にとっても安心して移動できるよう、歩きやすく安全な環境の整備や世代を超えて共通の趣味や関心を持ち寄ることのできる多機能な交流空間を確保することです。両者は地域のつながりを育む上で重要な基盤となります。
- ③ かかりつけ医や地域の医療・介護資源と連携しながら、住民一人一人の趣味や特技を活かしたフレイル予防や健康づくりの機会を創出することです。単なる介護予防の枠を超えた、地域全体の活力と安心感を底上げすることを狙いとしています。

3. 試しに実施してみる

住民と企画を考え、UDCODと小田原市が共に実施していく。徐々に仲間を増やしていく。このようなプロセスを経て、参加者や担い手を少しずつ広げていくのが

AFCの推進戦略です。

まず2024年10月に、豊川小学校を会場として、地域の生活課題を「自分ごと」として捉え直すためのシニアライフプランセミナーを開催しました（図3、5）。住民自身が求めた内容であること、またアウトリーチとしてチラシを配り、地区内のいたるところにチラシを配架してもらったことから、本セミナーには20名の定員を上回る28名が参加しました。地域医療、老後資金、介護予防に関する講話と対話の時間を通じて、自らの暮らしの輪郭を描き直す機会です。もしも、自分の人生を健康とお金だけに頼るのであれば、確かに老後には2000万円以上の預貯金が必要になるでしょう。しかし、地域の仲間と共に、楽しみながら支え合える地域資源を増やしていくことで、「いまだけ、金だけ、自分だけ」とならない、自分のためのまちづくりが重要だということを、理解していただく機会となりました。



(図5) シニアライフプランセミナーのちらし

アンケートでは参加者の93%が「満足」または「非常に満足」と回答し、中には「自分でも地域で何かやってみたい」との声や「地域を歩いて見直してみよう」といった具体的な意見も寄せられました。ここでもまた、先述の3つの課題と取り組むべきことを紹介します。

次は、参加者の意向に沿って、歩きやすさや多世代交流につながる、住民主体のお散歩マップづくりを行うことになりました。

4. 市職員向けの研修会の実施

2024年11月に、小田原市の高齢介護課、都市政策課、その他関係部署の職員を対象とした研修会も実施しました（図4）。「エイジフレンドリーシティと地域共生社会のデザイン」がテーマです。専門特化した政策の上では、専門外の都市部局が、なぜこのような地域包括ケアシステムやコミュニティ施策について取り組むのか、理解し難いと思います。これは市役所の中だけでなく、市民にとっても理解しにくいことかもしれません。

研修では、WHO が示す AFC の枠組み、少子高齢化時代の都市構造の変化、社会保障制度による対応の限界、住民の当事者意識を働き掛けることの意義などを論点としながら、小田原市における将来的な政策接続の可能性を共有しました。参加者からは、現場の実務と理論的なフレームが結びついたことで、業務への見通しが持てたとの感想が寄せられました。一方で、AFC の横断的フレームは理論としてはわかりやすいのですが、予算と法律によって縛られる既存の制度をどのようにつないでいくかは、これからの研究課題です。

5. コミュニティ・エンゲイジメント(自分事化)

シニアライフプランセミナー終了後、豊川地区の住民との協働による地域資源の発見と関係性の再構築を目的とした「お散歩マップづくり」プロジェクトを展開しました(図6)。

地域住民の経験や記憶に根差した情報を可視化し、四季折々の風景や身近な歴史資源、買い物の拠点、トイレやベンチといった生活インフラまで、多様な視点を集めて編集していきます。お散歩マップは単なる地図ではなく「誰が、どこで、どのように出会えるか」を設計する媒介となります。長期的には、豊川地区そのものを“関係性の場”として捉え直していくことを念頭に置きました。

お散歩マップづくりでは、地域包括支援センターや社会福祉協議会の職員、市議会議員、民生委員も参加していただきました。制度と市民をつ

なが新たな対話の空間でもあります。

3月末に開催された世代間交流イベントでは、巨大な「ガリバーマップ」を持ち込みました。子どもたちを中心に思い出やお薦めの場所を書き込む様子が見られ(図7)、地域における情報の共有と世代間の信頼形成の一步となりました。

地域づくりの場面では、参加者が少ない、いつもの人しか来ないという声を聴くことがあります。大切なのはアウトリーチです。興味がありそうな人のもとへ押



上：(図6) お散歩マップづくりワークショップ

下：(図7) ガリバーマップ

しかけてチラシを届ければよいのです。今回はまず、シニアライフプランセミナーへの参加者を誘いました。次に、豊川地区の郵便局やクリニックにチラシを配架いただきました。さらに、国府津小学校で開催された川東地区グラウンドゴルフ大会に、アウトリーチ活動の一環として参加して、ワークショップ開催を周知しました。子育て世代のニーズを把握したいということでは、

豊川地区社協主催の世代間交流事業にお子さんが大勢参加するとの情報を頂き、私たちも参加させていただきました。

6. まとめ

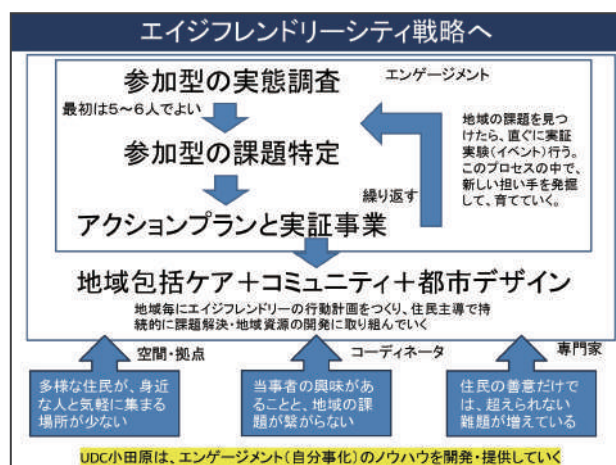
2024 年度の取り組みを通じて、UDCOD が目指す AFC の実現に向けた土壌が、豊川地区において着実に耕されつつあることが分かっていただけたと思います。AFC をつくることは特に難しくなく、ニーズをもとに小さく始めて仲間を増やしていくという手法につきると思います。UDCOD の後方支援はもちろんですが、対話とイベントにより少しずつ地域課題が自分事化していきます。

お散歩マップが完成したとして、次はどのように展開していくのでしょうか。これも対話と実践の中で、徐々に皆さんのイメージは明確になっていきました。お散歩コースの話をしていると、シニアにとってはベンチやトイレなどの休憩所の確保が論点になります。美しい風景や景観の話になると、どのようにして、維持管理していくかについても自然と話題になります。子どもが気軽に集まるのは豊川小学校の近くの三角公園との

ことです。ある公園は、監視カメラがあるので、親も安心して遊びに行かせられるという声もありました。家に閉じこもらず地域への愛着を子どもたちに持ってもらうようなイベントや常設の居場所づくりの話なども自然と進んでいきます。

議論と実践を通じて明確になってきたエイジフレンドリーシティの論点は、たくさんあります。例えば、なぜ「つながり」が必要なのか。地域の中で孤立すると、自分の必要な情報が入ってこなくなり、さらに孤立を深めるようです。ワークショップでは、豊川地区で暮らし続けるための知恵や使える資源の情報が共有されました。

2025 年度は、さらにもう一步進めて、まちを舞台にした新しいケアと支援のモデルを社会に提示していく段階を目指したいと思います。地域における「やってみたい」が、興味のある人同士をつなげ、そして制度ともつながり、まちのデザインがケアの手法となるような、そんな AFC の実現に向けて、UDCOD は引き続き取り組んでいきます。ぜひ、みなさんも自分事と思って、参加してみてください。



2024 年度の主な取り組み

- 2024.10.13 シニアライフプランセミナー
- 2024.11.19 小田原市職員向け講演会
「人生 100 年時代に求められるまちづくり」
せんとう
- 2025.01.26 川東地区グラウンドゴルフ大会への参加
- 2025.02.01 お散歩マップづくりミーティング①
- 2025.03.02 お散歩マップづくりミーティング②
- 2025.03.29 豊川地区世代間交流事業への参加